

競馬がますます
楽しくなる

続 ファンにやさしい

馬学講座

第46回

馬におけるオスとメスの違いとは ③

講師

楠瀬良さん

公益社団法人
日本養育協会の
常務理事



案内人：辻谷秋人
text by Akihiro Tsujiya

牝馬は牡馬に比べて
コンディショニングが難しい

新しい環境に不安を感じたり、仲間への依存が高い傾向が牝馬にはある、つまり牝馬は牡馬に比べて恐怖感を持ちやすいというのが前回の話だった。では、そういった牝馬の性格が競走馬としてどう影響するのかといったあたりを、引き続き日本養育協会の楠瀬良さんに伺っていきこう。

「調教師のみなさんがよく言うのは『牝馬は難しい』ということ。例えば、人の言うことを聞かないとき、男馬はちゃんと叱れば直ることが多い。ところが、牝馬の場合、もっと悪くなってしまうことがあるんです」
叱られた、ということに過度に反応してしまい、それが恐怖になってしまう。怖くて、人に従う余裕もなくなってしまう、ということだろう。
「もうひとつ、牝馬はコンディショニングも難しいといえます。大レースが近づくと飼い食いが悪くなったりするのも牝

馬に多い。周りを取り巻く人間の、いつもと違う緊張感を敏感に感じ取って、不安になってしまうのでしょうか」

牡馬の方が成績がよい、大レースに勝つのは牡馬が多いという競走における牝牡の差は、肉体的な競走能力だけでなく、こうした牝馬特有の事情が原因のひとつになっている可能性があるのだ。

特定の牝馬が活躍した印象により
牝馬全体が強化した感覚になる

しかし近年、牝馬の活躍がたいへんに目立つ。ちよつと遡ったウオッカ以来、ブエナビスタやジェンテイルドンナ、ハープスターといった歴史的名馬が立て続けに出現している。海外でもトレヴが凱旋門賞を2年連続で優勝した。牝馬をめぐって、何かが起きているのだろうか。
「もちろん、調教技術が上がったことで牝馬の能力をより伸ばせるようになった、持っている能力を最大限に発揮できるようになった、という可能性はあるでしょう」

しかし、と楠瀬さんは言う。

「とはいえ、特定の牝馬の大活躍の印象があまりに強く、それが牝馬全体が強くなったかのような感覚に置き換わっていることは否定できません」
こうした「ごく一部の限られた現象が、その印象の強さのために一般化されてしまう」ことはよくあることで、競馬に限らずゲーム系の格言の類にはそうしたのも多く見られる。サッカーでいう「2-0は危険なスコア」が好例だろう。2点リードすれば大丈夫だろうと思っただけの逆転を食らったという印象が強いために、1点差より2点差の方が危ないみたいな話になってしまう。もちろん、そんなわけがないのは明らかだ。

もうひとつ、楠瀬さんが指摘するのは、牝馬を取り巻く環境の変化だ。
「以前は3歳時に活躍した牝馬は早いうちに繁殖に入る傾向がありました。現在は競走生活を長く続ける馬が増えてきました。その影響もあると考えられます」
力のある牝馬が古馬になっても競走を続け、牝馬だからどうせ牡馬には適わないだろうとは考えず、天皇賞やジャパンC、有馬記念のような牡牝混合の大レ

スに挑む。そして、勝つ。そんなケースが増えているのではないかと、いうわけだ。

ここで前々回の話に戻る。サラブレッドの体格的、走能力的な性差は、さほど大きなものではない。個体差でひっくり返る程度のもので、競馬では牝牡の斤量差があるのでなおさらといえる。強い牝馬が牡馬に勝つのは、不思議でもなんでもないということなのかもしれない。



JRA
馬における競走能力の差は、性差よりも個体差の方が大きいという